

(6) 信州上田への疎開

3月の東京大空襲を受け、東京帝国大学も被害を蒙った。建物の損壊や火災が発生しただけではなく、大学の機能も失われた。各学部の研究室も疎開を考えたが、その疎開の手配は大学本部や学部本部が行なうのではなく、各研究室の縁故を頼り、才覚を使って自分たちで疎開先を探さなければならなかった。大学はまったくなす術を知らなかった。



加藤が所属する佐々内科は信州上田の結核療養所に、わずかの患者と医局員の三分之一が、少しの医療機器

と薬剤とともに疎開することになった（今日の国立病院機構信州上田医療センターと思われる、左写真は疎開した佐々内科の人びと）。

しかし、日本国政府と報道は、あいも変わらず「本土決戦」「焦土作戦」「竹槍作戦」「一億玉砕」「鬼畜米英」を声高に唱えていた。上田の療養所には防空壕もなく一台のポンプもなかったが、それでもバケツリレーの防空演習を真面

目に行なっていた。反戦的だと思われていたらしい療養所長と加藤には、話しかけてくる人もなく、それとなく避けられていた。